

史遊会通信

NO. 187
平成22年
5月15日
発行

事務局
☎
03-3712
0651
下山田方

四月例会

『歴史のみち草』を読んで

——読後感想会報告——

森 下 征 二

四月二十八日、史遊会の四冊目のエッセイ集、『歴史のみち草』の読後感想会が、目黒区民センター社会教育館で開かれた。

内容がそれぞれ専門的であるため、互いに評価し合うことは、難しいのではないかとこの疑問の声もあったが、せっかく一冊の本として出版したことであり、互いに感想を述べ合うのは意義があるとの考え方から、読後感想会として、今回初めて開かれたものである。

いざ、開いてみると、殆んどの会員が出席し、それぞれ熱心に感想を述べ合っただけでなく、異なった立場から、ユニークな指摘が数多くなされた。

また、本書の多彩な内容が、改めて再認識された。本会の活動分野が単に歴史だけに留まらず、考古学や社会学に政治学、更には、漢詩を始めとする中国古典の全般へと広がり、多層的な活動が可能になったことが、この感想会の実施により確認されたのである。

限られた紙面なので、全てを述べるわけにはゆかないが、可能な限り個々について紹介してみよう。

まず、新井宏氏の「江田船山古墳の銀象嵌大刀」は、今まで国字とされてきた文字が、この古墳との関連で見る限り、高句麗発生のものではないかと指摘される。傾聴

例会のお知らせ

◎ 5月例会

日時 平成22年5月26日(水)

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

講演 佐藤健一氏

テーマ 未定

自由執筆は相原精次・中込勝則・

瀧澤中の諸氏。締切りは5月末

◎ 6月例会

日時 平成22年6月23日(水)

午後6時～8時

会場 目黒区立中央町社会教育館

講演 瀧澤中氏

テーマ 未定

自由執筆は平山善之・山本鎮雄・

三戸岡道夫の諸氏。締切りは6月末

〔注〕六月の会場は中央町社会教育館です。お間違いないようお願いいたします。会場案内図は5月の例会日に配付します。

すべき説であり、出席者から、数多くの意見が寄せられた。我が国の銅の精錬時期を、紀元前四百年頃と推定する中山喬央氏の、「ユーラシア大陸における金属文化の発生と日本列島への伝播」も同様である。

また相原精次氏の「『朱鳥元号』と『万葉集』」は、『日本書紀』と『日本紀』の相違に着目された独特な視点が出席者の興味を集め、隆恵氏の力作「謎の飛鳥時代」や平山善之氏の「古代の東国について」と共に、日本古代史の謎に積極的に挑戦する姿勢が高く評価された。

他方、宅見勝弘氏の「源平交代思想」や、千坂精一氏の「長尾政景水死事件のこと」、及び島津隆子氏の「稀代の軍師―黒田官兵衛孝高」は、そのユニークな内容が注目を浴びたが、それと共に、著者の持つ表現力の確かさが指摘された。

また、素材とその扱い方について話題を集めたのが、三戸岡道夫氏や柴田弘武氏、更には佐藤健一氏の作品である。

三戸岡氏の「関東郡代伊奈忠次のこと」については、伊奈忠次の能力や統治者としての徳川家康が、柴田氏の「御小人目付高松彦三郎」については大原幽学との関連な

どが、また佐藤氏の「内藤家に召抱えられた数学者」については、和算学者たちの独特な性格等が注目を集め、活発な感想が述べられた。

一方、日本史を広くグローバルな視点から取り上げた作品も、非常に多くの共感を呼んだ。

太田精一氏の「大航海時代前後の日本の対外関係」、高橋由貴彦氏の「大航海時代で見た『慶長使節』」及び、鍋屋次郎氏の「日本の扉を開けた鍵」である。

前二者は何れも、世界史の転換点となった大航海時代を取り上げており、後者は、和英・英和辞典を編纂したヘボンの偉業を描いた力作であるが、それぞれの持つ独特な考え方に対し、熱心な意見が取り交わされた。

また、政治の分野の力作へも、非常に多くの感想が寄せられた。戦前・戦中の政治・社会を描いた松川博光氏の「昭和戦前・戦中期論」と、郵政選挙に焦点を当てた政治史から見た政治報道のあるべき姿を論じた、瀧澤中氏の「マスコミと政治の不即不離な関係」である。身近で重要な素材だけに、これら二篇の力作が大きな関心を集めたこ

とは、言うまでもない。

そして、忘れてはならないのが、山本鎮雄氏の「柳田國男『習入考』(一九二九年)以後の展開―日本婚姻論史覚書」であろう。

これは、今まで史遊会で取り上げられることが少なかった、社会学の視点から纏められた力作である。日本における婚姻論史は、広く出席者の興味を呼び、活発な質疑応答が行われた。

最後に、中国古典の関係では、三篇があった。特に、鯨游海氏の「漢詩 孔子の一生」は字数八四六字、中国でも殆んど例を見ない大作であり、中込勝則氏の力作「杜甫飄泊(序)」と共に、高い評価を受けていた。

席上、外部の方々からの感想も、会員から披露された。代表的なものとしては、書道の大家・杭迫柏樹氏が毛筆の書状で、鍋屋氏へ激励と感想を寄せられたことが挙げられよう。何れにしても、外部の方々の反応は、概ね良好であったように思う。

この『歴史のみち草』の発行を契機に、我々はこれからも「史遊会」の会員らしく、大胆かつ細心に歴史を語り、研鑽してゆきたいものである。

読後感想

「朝に道を聞かば、

夕に死すとも可なり」

正木 清幸

見事な出来栄え『歴史のみち草』ご発刊お祝い申し上げます。事務局より読後の感想文投稿のお契めを賜り恐縮致しました。

先ず彩流社の封筒より現れたカバーは、想像を絶する素晴らしいデザインで感銘！これならユニークな題名と共に同好の士が店頭で必ず手にされる事と確信致しました。さて本文に入りますと「みち草」どころか著者の一字一句も忽せにせぬ精魂込めた研究論文で、これまた深く感銘致しました。

既刊の三巻は「異能集団のエッセイ集」が売りで、気軽に拝読致しました。今回も「みち草」の言葉につられ軽い読み物と思いきや、考古学・金属学・歴史学々々現在の学会で定説とされる学説を覆し、或いは新説を展開され、更に歴史に埋もれた真実を掘り起こされ、正に史遊会の面目躍如！編集長以下ご苦心の程が察せられました。

凡夫の身、縄文を兎に角読了せんと苦闘

する小生に対し、家人は「その歳で今更遅くまで何してるの、早く寝たら」と申しますが、「子曰く、朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり」と昂然と応えた事を申し添えます。

さて最後に私の感慨と申すか老人の繰言を申し上げる事をお許し下さい。

最近の日本は米国の核の傘下に安住し、政治家の腐敗、官僚の無気力により、その行方を失っています。我等の尊敬する史遊会の諸賢は今後の為政者は如何にあるべきか、所見を是非お聞かせ下さい。瀧澤中氏の「マスコミと政治の不即不離な関係」が現代の日本を本書の中で論じておられますが、今後の史遊会の論議に期待しております。(友の会)

出版おめでとうございます

遠藤 和子

『歴史のみち草』をお贈りいただき、心からお礼を申し上げます。ご芳情のほどに感謝いたしております。

本当您に出版、おめでとうございます。

編集、校正もあってさぞかし大変だったことでしょう。

「埋もれた真相に挑む」「発想をかえると見えてくる歴史の「コマ」との表書きを目にし、私を取り組んでいる姿勢そのものだけに嬉しく、「同志の方々、私もその一員」と気を強くしました。また中山喬央氏の「あとがき」に共鳴することしきり：。目次を目にして、いま私を取り組んでいるものと密接な関係がある項目、

・大航海時代前後の日本の対外関係

・大航海時代で見た「慶長使節」

・関東郡代伊奈忠次のこと

この三点を読みました。よくお調べになつていて、文に無駄がなく、内容に説得力があつて、随分と参考になりました。

それぞれすばらしい作品を書いていらっしゃることに尊敬の念を深くしております。いい立派な会、史遊会です。誇りです。ずっとずっと継続されますよう、またつぎの作品を発表されますよう陰ながら応援し、祈っております。(元会員 富山市在住)

『事務局より：遠藤氏は四月に学陽書房より『佐々成政』を出版。本会に寄贈がありました。』

自由執筆
安房の名族

里見氏と正木氏

千坂 精一

曲亭馬琴の伝奇小説『南総里見八犬伝』で周知の里見氏は清和源氏新田流で、上野國新田莊を開いた源義家の孫新田義重の子義俊が、同國碓氷郡里見郷に住して里見と称したのはじまる。

里見氏は代々鎌倉公方に仕えていたが、十代家基は、公方持氏の二人の遺児を奉じた下總の結城氏朝とともに結城城に籠城して幕府に反抗し、関東管領上杉軍に攻められて討ち死にした。そのとき嫡子義實は家臣に守られて相模國に落ち延び、三浦氏の援助を得て船で安房國へ渡り、白濱の野島崎（南房総市白浜町）に上陸して、のちに白濱城を築き拠点にした。

これが安房里見氏のはじまりである。三代義通は病弱だったので、弟の實亮に五歳の嫡男竹若丸が成人するまでの国政を託して三十八歳で歿した。

名を義豊とあらためた竹若丸が二十歳に

なったとき、叔父實亮がわが子義亮を後継者にしようとしていたとの噂を信じて、宮本城（南房総市富浦町）に兵を集め、實亮の稲村城（館山市稲）を襲って自殺させた。上總國久留里城（君津市久留里）にいた實亮の嫡男義亮は義豊の所業を怒り、義豊を攻め、ついに稲村城に追い込んで自殺させると同時に、棟梁をも奪い取った。

家督争いの内紛はよくあることだが、安房里見氏もこのときが存亡の危機であった。その義亮にも苦汁を嘗めた戦いがあった。小弓御所足利義明を擁して北條氏綱・氏康と戦った國府臺（市川市）の合戦である。

このとき小弓御所方が敗れて義明が戦死したので、義亮は領國安房へ退いた。

このころから世は戰國乱世になり、義亮は、上杉謙信と結んで小田原の北條氏や下總國の千葉氏などと対立した。

義亮の嫡男義弘は江戸城の太田康資、岩付城の太田資正と呼応して、北條氏討伐に向かい國府臺で氏康・氏政軍と対峙した。父義亮のときから二十六年が経っていた。

利根川（現江戸川）右岸に着陣した北條軍が浅瀬を渡って台地に攻め上ってくるのを攻め落として大勝した里見軍が、祝盃を

あげている弛緩を衝かれ、北條軍の夜襲に遭って義弘は上總國へ敗走した。

ときは移って秀吉の小田原攻めるとき、義弘の孫義康は秀吉の督促に参陣が遅れた廉で戦後上總國を没収されて安房一國九万二千石となり、家康の支配下におかれた。里見氏の不運は義康の嫡男忠義のときにやってくる。

慶長十九年（一六一四）、大久保長安を庇護して改易された小田原藩主大久保忠隣に連座した罪で、館山藩十二万二千石を公収され、伯耆國倉吉藩三万石に封ぜられた。忠義が忠隣の嫡男忠常の女を娶っていたことが禍したといわれているが、実のところは、忠隣と本多正信・正純父子との派閥争いに巻き込まれての外様取潰しであった。

流罪同様に倉吉へ左遷された忠義は結局嗣子なく断絶させられ、名族里見氏は上野十代、安房十代で終わってしまった。

里見氏の菩提寺は、南房総市府中にある曹洞宗延命寺で、里見義亮が二百石余の朱印地を与えて父實亮を埋葬したのにはじまる。境内には實亮・義豊・義亮・義弘四代の墓（五輪塔）がある。中央の板石塔婆は、彌陀・觀音・勢至三尊の梵字と諸行無常の

四句が刻まれた板碑で、正安三年（一三〇一）の銘がある。板碑は他に保田の鹿峰山眞福寺にあるくらいで、安房國にあるのは珍しい。

ほかに里見氏は、おなじ府中にある真言宗寶珠院を祈願所にして三百石の朱印地を与えていた。この寺の本尊十一面觀音立像は高さ二・一六メートルの一本造りで、県文化財に指定され、安房地方で最も古い仏像といわれている。

里見氏はなぜこの地を選んだのだろうか。今は田園の広がるこの地方は、「府中」の地名が残っているように、ここ旧三芳村は安房國の中央部で、国中ともよばれ国府があつて、当時は安房國の政治、経済、文化の中心地であつたのだ。

正木氏は桓武平氏三浦流である。

三浦氏といえば、衣笠城（横須賀市）を本拠にして三浦半島南部の三浦郡、横須賀市、三浦市一帯を領していた大豪族である。

頼朝の旗上げ、というより東国武士団のクーデターが成功して鎌倉に武家政権の幕府がひらかれると、執権北條氏は肩を並べる豪族たちの梶原景時、比企能員、畠山重

忠、和田義盛らを次々と斃した。最後に挑発に乗った三浦泰村が敗死して嫡流家が滅んだとき、一族の蹶起に加わらずに生き残った泰村の祖父義澄の弟佐原十郎義連の系が、のちに三浦氏を復活させた。

佐原氏の名告りになった佐原（横須賀市佐原）はJR久里浜駅の西にあつた。

義連から五代あとの時高は、鎌倉公方足利持氏が幕府に叛逆を謀った永享の乱で、関東管領上杉憲實に従って功績をあげた。

その時高には子がなかつたので扇谷上杉持朝の二男高教（たかちか）を養子に迎えた。その子が義同（道寸）である。養子を迎えて男子が誕生したそのあとに、老齢になった時高に実子が生まれた。のちの時綱である。

義同は、時綱が長ずるに及んで時高に溺愛されわが身の存在が危うくなってきたので、明應三年（一四九四）突如時高の荒井城（三浦市）を攻め陥として自害させた。このとき時高は、愛児時綱を船で安房國へ逃がした。

平群郡正木郷で成人した時綱は正木氏を名告って里見氏に協力し安房國を守った。

正木氏の最盛期は時綱の子時茂・時忠兄弟のときで、東上總へ攻め入って時忠は勝

浦城（勝浦市浜勝浦）を、時茂は大多喜城（夷隅郡大多喜町）を攻め陥として本拠にしたので、時忠は勝浦正木氏となった。その後、時茂の養子憲時は里見氏に叛いたので、安房八代里見義頼に攻められて敗死した。正木嫡流家の滅亡を惜しんだ義頼は、憲時の二男彌九郎時亮に正木氏を継がせた。勝浦城の正木時忠も里見氏を離叛して北條氏と結んだ時期があつたが、その後また里見氏のもとに復帰した。

里見氏と命運をともにして衰退した正木氏だったが、時忠の二男頼忠の女（むすめ）萬が、天正十八年（一五九〇）徳川家康に召し出されて側室になり、慶長七年（一六〇二）十男頼宣（紀伊）、翌八年には十一男頼房（水戸）を産んだので、のちに萬の兄為春は三浦姓に復して紀伊藩の家老になり、この系が幕末までつづいた。

南房総市和田町にある正木氏の菩提寺は、もと旧領主眞田一族の菩提寺であつたものを、元龜二年（一五七一）正木頼忠が父時忠の菩提を弔うため自ら日蓮像を刻んで本尊とし、日蓮宗に改宗して正文寺とした。境内に正木頼忠の墓、丘の上の墓地に三浦道寸、正木時忠、時通と累代の墓がある。

自由執筆

旅の思い出 ウィーン

島津 隆子

毎年、春の訪れとともに、そぞろ旅心に誘われ、初夏と晩秋のよい頃合をみて、旅の計画をたてた。だが、今年は春になって冬冬の延長のような寒さで、とうとう桜の花にも義理を欠いた。おまけにアイスランドの火山噴火のおかげで、欧州の空は火山灰で覆われ、二十ヶ国以上の空路が閉ざされて、大混乱を招いていると聞く。

ちっぽけな老女の日常も、天候や地異の影響をもろに受けることを思い知らされた。予定通りに飛行機が飛び立ち、旅の日程を無事にこなして帰宅することが、実は至難の業に思えたりもする。

そんななか、過ぎた旅の思い出を懐かしく辿ってみることにした。

去年の秋も深まった十一月、ウィーンとブタベストに出かけた。

ウィーンは雨に濡れた落葉の舗道も、両側に建つ彫刻が施された建物も芸術的で印象深い街だ。歴史を感じさせる重厚な文化

の香りに充ちていた。

まず、環状道路の内側に位置し、六百五十年の長きにわたってハプスブルク家の居住だったという王宮ホーフブルクに行く。

宮廷で使用された夥しい数の銀器や食器やコレクションが飾り欄に収められている。階を辿ると、十九世紀の皇帝フランツ・

ヨーゼフと、その妻后妃エリザベートが生活したという数え切れないほどの部屋がある。贅を凝らしたその中でも目を惹くのは、美しい上にもなお美を追求して止まないエリザベートの私室に備えられた健康器具であった。美しくあることへの執念を感じた。

それらに目くるめく思いで外に出、真向かいの角にあるカフェ「グリーンシュタイトル」に足を留めた。一八四七年に開店した当時、ここは革命家たちの溜まり場だったとか。そして十九世紀末には作家たちの集う文士カフェだったらしいが、やがて閉鎖された。だが、一九九〇年に再開したという。歴史あるカフェだけあって、店の雰囲気は自由だが重々しく静謐そのものだ。私の註文は迷わず、ウイスキー入りのアイリッシュ・カフェとしゃれたつもりだ。

その昔、東京の街には喫茶店が沢山存在

した。今でいうカフェである。そこで若者たちは、音楽を聴き、友人と映画や文学を語り、恋を囁いたものだ。しかし昨今、東京の街から喫茶店はめっきり影をひそめた。カフェの都といわれるウィーンの街にはさすがに居心地のよいカフェが多い。疲れた旅人の小休止には有難い。

「ザッハー」はその名前のとおり濃厚なザッハートルテが有名なので、観光客で賑わっていた。映画「第三の男」に登場する「モーツアルト」は優雅な雰囲気でも好ましい。さらにオペラ座で「サロメ」を観た。そこは永く大切に維持されている文化財としての価値観が伝わる。美術館では画家クリムトやエゴン・シーレなど世紀末美術に逢う。

それからこの街の南西にあるウィーンの森まで足を延ばした。森は黄色の濃淡が美しい紅葉に染まっていた。エリザベートの息子である三十歳の皇子が十七歳の恋人と心中した処に、祭壇を設えたマリヤリーンク修道会が建つ。皇子を喪った母エリザベートは、ずっと喪服姿で過したという。

自由執筆

「狂」ということ

森下 征二

「論語」や「孟子」によると、儒教では人を次の四つの類型に分ける。

- ① 中行：行いに過不及のない中庸の人
- ② 狂者：志が極めて高く、その実現に積極的に取り組む理想主義者だが、屢、実行力の伴わない者
- ③ 狷者：志は高くなく、知識レベルも低い、それなりに、それを懸命に守る者。狷介な性格の持ち主。
- ④ 郷愿きょうげん：一見、徳があるように見えるが、不誠実で世渡り上手。似非道德者。孔子言う所の「徳の賊」。

この中で、私が注目するのは狂者である。儒教が理想とする「中行」は、孔子自ら認めるように、現実の世の中には、殆んど見つけることが出来ない。

だからだろうか？ 孔子は次善の策として、律儀一途の小人よりも、志が極めて高

く、積極進取の気性を持つ、狂者を推奨したのである。

二千年以上も前に、孔子や孟子が高く評価した「狂」の意識は、それからずっと後の、明の時代（西暦一三六八～一六六二年）に入ると、陽明学の勃興により、一世を風靡するようになる。

そして、陽明学徒の中には、「狂」こそ、聖人となるための真の道である……と、主張する者も現われた。

彼らは言う。狂者は志が高いため、それを実現できないことも多いだろう。しかし、何の虚飾もなく、何の隠す所もなく、心のまま率直に行動する。その結果、もし過ちを犯したとしても、それは、改めれば済む話ではないか。要は、「狂」であることが大切である。この「狂」こそが、聖人になる真の道である……と。

他方でまた、陽明学は「知行合一」を重視する。実践を旨とし、行動に発現しないような知は、知ではないと考えるのだ。その結果「狂」の意味は激しさを増し、これを重視する陽明学は、益々急進性を帯びてくる。ラディカルな結社を作り、忠・孝よりも朋友間の「信」を、第一義とするよう

になるのである。

そして、江戸時代……、この陽明学が中江藤樹や佐久間象山などによって、わが国でも盛んになる。象山の弟子・吉田松陰が最も傾倒したのが、陽明学左派の重鎮、李卓吾だった。彼は人間の欲望を正面から肯定し、儒教の硬直した枠組みをかたっぱしから覆した。政治は須らく、時代に即して現実的でなければならぬと、主張したのである。

松陰は勿論、この卓吾の思想を受け継いでいる。それが、高杉晋作や久坂玄瑞を始め、武市半平太や山県狂介（有朋）などに伝えられ、維新の志士に大きな影響を与えた。おそらく、徳川三百年の幕藩体制は、この「狂」の意識なくしては、突き崩せなかったのではないか？

明治維新の成功は、当時の東洋の人びとに、「狂」の意識の重要性を改めて認識させることになった。

十九世紀の末、西欧列強の侵略に悩んでいた中国に、李卓吾の思想が日本から逆輸入されたのである。

おそらく、維新を断行した志士の行為を学ぼうとしたのではないか？ 清末の在日

